閨訓歌寄畫

へ13
2946
148

148
へ13 特
2946
148

醒草閣自序

貞女両夫ハまことに忠臣永くよ深編生伝

一對の馬鹿律義ハ獨娘ハ婿八人乃譬ひ

たつね昔くも師匠さんもあつたもつと歟もんそ女子ハ

一生に夫ハいとハ唯ひとり夫をお半ハ桂川是を生田の

川水ハ浮名を流せ三巴娘獨に婿ふたりけりもうとも

當りを祝ひハ作者獨を重工版元孰を孰問乃足

三人倚そ三文ハ智恵ハ揮ふ三冊物三年ぶるふて

毫と採ふをお馴染の　文化乙丑春且　式亭三馬題

娘訓歌字盡

一人娘　婿八人

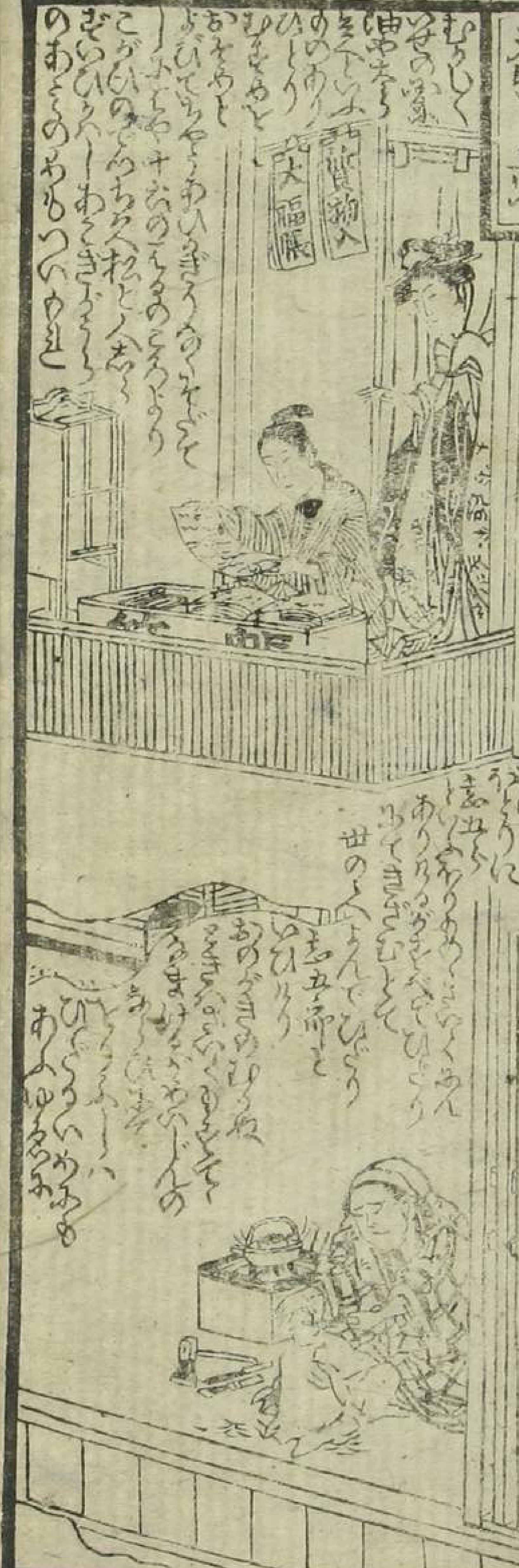
神明前和泉屋市兵衛版

一部の大意

頃日よくぞうのひまよみて。明の李卓吾が山中一夕話とかいふ桐城女の條下にありけるの趣向かよくにて。我邦海鳴散人が婦人寺にかひ竹に見えし。伊勢や日向の物語に備りより。和漢一轍の辞し怪しく。おもしろくも亦めづらしに是を淨るりのお染久松お袖条之助がるの蹟にひろげし。又ハ西の作者物語にすぐくて例のきうしゆつる是則虚をもって實につく実をもって虚にちかくその戯作者であるゐ。趣向のよれはわかるまで故下師のふかのしゆうろを教かに似されどもちうごろ歌詩のさうしに滑稽の名とうぶつ迄三年ぎとらぶれば綴切形とうしるべからん。作者が筆のかきまぎらしてい稀らかくハ江戸氣の味さぬ歌詩のかくことを毎年て去ル三春町傳来の有本れくらけるを。あのが田へひくゐかけらん。ぬくまれぐらあるあがらんぎるへ志ぞよく申て。ずらり青本の騒ぐ流一行の老婆が不おつきあふされませう

發端

作者の胸より趣向のうかむ圖



むかしくその家の油やまちの久松といふよしのゆめのありしより おそめとおそめと おそやと よびてきうりやうのあいさつのわかれそで しふちわ子ごのころのこころより こがひのへちうちの久松と人志らく ざいひへしわきさうこう のあくのやまうつりかまし

ある日ころ お染がちうき うちうにまち 志出ても へいそめのありさまのいかくれみぐん ありがたくおそんで ひがぐり ふてきざむとて 世のくくらんてひがり 志五郎と ひかり おのでうあひを まさいかなくらく てきまけかるかへるの ひくらいめがおる おへゆるとお

向ふのあかきとべしと閑くその志つく とぞ志つりける

こゝに又ひらがのの関に茶やの娘にて志ゝといふ うちくまかのも ひきをにおむかひの とくへがつとそのの ありたがぐらん石でう の小性条之助 条之介とござ 甘その出へけるふ くびつけ ともゝりてこ二世も三世も ちかくれせうるふ さかりのありくのちきまい あつとちてくちも出わおるず いりぐへおとびた合せて おしやうたへお袖がひや お袖がむつこにのりうんと すんづうかぶぐらつそくのくけり

そのころお袖が きん およは ちぶの ちくさそ ろつく ゐゑやかりしふおんぐつの やまとちぶおくぶしく きとて世さくらめきんち

ゆてらべくてけんやまや うちの大き出もとより へんぐやくそこの ぎをけざし まんどまどろふぎぶのきと 志う事とてうききょかくつよしぬれり

おきそてみて ゆあと みぐぞとるるとはこまし

諸惡莫作
閻羅天子
油屋おそよ
修善奉行
冥吏
茶屋
鬼
鬼

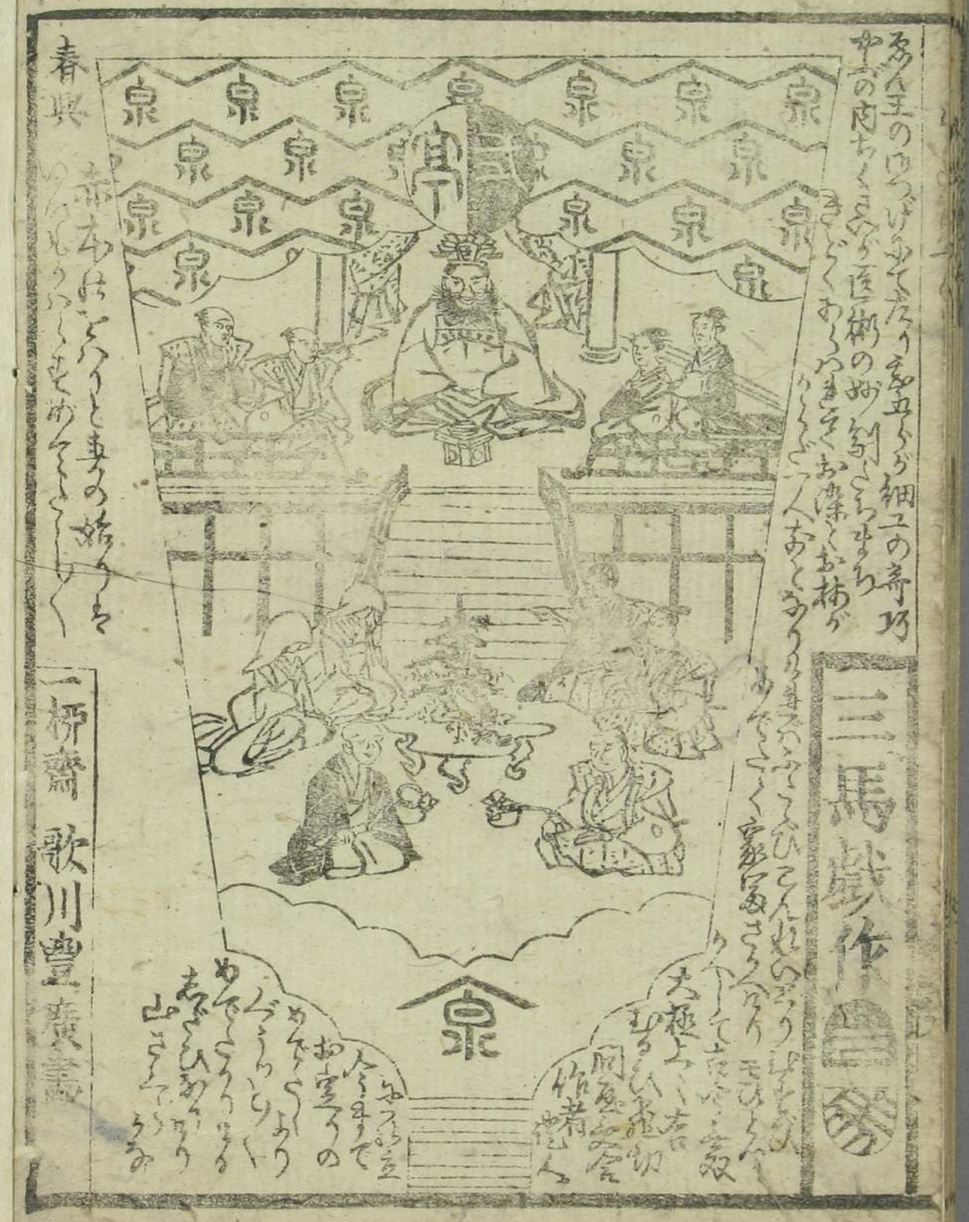
魂
魂

さん
おまへ
とつふ
ぢう
しゃ
ちゃ
治
油屋

貧乏神
此所
心中
無用

貴
財源
白
油

元禄十二年


三馬戯作
一柳齋 歌川豊廣 畫